

■研究・実践の課題（テーマ）

栄養教諭の食育への貢献因子—栄養教諭の配置効果の実例を通して—

■主任研究者 安達内美子

■共同研究者 新谷裕

■研究・実践の目的、方法、結果、考察や提案等の概要

【研究・実践の目的】

教諭という職種が自分にとってどのような意味を持っているのか。将来の職業を決定するにあたってどのようなことがもたれているのかを自己実現という観点から見てみようとするのが本研究の主目的である。自己実現とは自分が考えていることが実社会の中で活用できるか、自分自身が社会に受け入れられるかということである。また、現状と理想とのギャップを認識しつつ、しかるべき対応を行うことで、よりよい方向へと状況を変えることができるかということである。言ってみれば自分の持ち味がどの程度受け入れられるかなのではないか。そこでその関わりのある要因を挙げてみると、まず自己理解から始める必要がある。そこで自己価値をどのように認識しているかということから自己肯定感、自己効力感があげられる。また自分が他人からどう見られているのかといった私的自意識、自分にはどんな能力があるのかといった有能感や自尊心があげられる。自己を満足させるに値する動機も大きな要因となる。K.Horney が言っているように「自己実現は現実の生活の中で表現していくこと」であるから、実際の働く現場での観察も重要である。

これらのことを網羅すべき質問項目を探し出すことによって各個人のなかに内在する自己実現に関わる要因の相互の関わり合いを探る前提条件となるアンケートをつくることを目的とする。これは、教師側即ち指導者のみの力だけでは意味を持たない。すなわち自分自身の自己実現を自らの手で探るといったアクティブなものでなくてはならない。ここでは、アクティブ・ラーニングの手法とメタ認知の理論をキーワードに取り組んでいく。

【方法】

自己実現に関わる下位尺度の質問項目を作成するにあたっては、教育方法論の「授業の展開—学ぶということの意味」の講義を受講する管理栄養 3 年次の受講者 22 名、進路指導論「自己実現とは」を受講する幼児保育 4 年次の 43 名、同じく進路指導論を受講する子ども心理 4 年次の 16 名の合計 81 名を対象に実施した。授業では、A.H.マズローの欲求段階説の最上段にある自己実現にはどのような要因があるかを考えさせるために、「自己実現事前調査」6 項目、「自己肯定意識尺度」(平石,1990)19 項目、「自意識尺度」私的自意識(菅原 1984)10 項目、「自尊感情尺度」(山本ら 1982)10 項目、「達成動機尺度」(堀野 1987)13 項目を基に教材化した質問紙を使って 5 段階(1.あてはまる、2.どちらかといえばあてはまる、3.

どちらともいえない、4.どちらかといえばあてはまらない、5.あてはまらない)で評価してもらった。

まず対象者に「自己実現事前調査」を行い、自己実現を行う準備段階での状況を把握し、6項目の内容がどの程度の割合であるかを調査し、その記述統計量を測定した。次に自己肯定意識に関わる項目と自意識(私的自意識)、自尊感情、達成動機に関わる項目の内容を分析し自己実現に関わる因子を探る目的で因子分析を行った。因子分析の方法は、主因子法・プロマックス回転で実施した。更に、高い負荷量を示した因子の平均値、標準偏差、内的整合性を調べると共に、見つかった因子の相関を測定した。

【結果】

まず自己実現を行う準備段階での状況把握を行った結果をみると、「実行時の過去への振り返りと「実現可能な能力の把握」、「実現時に、他人の援助や協力を求める」といった項目が若干低い値であることがわかる。続いて、因子分析を行い、各因子に高い負荷量を示した項目の平均値を算出した結果、6つの因子が求められた。更にこれらの平均値を求めた。内的整合性を検討するために α 係数を算出したところ、自己受容で $\alpha=.841$ 、自己実現的態度で $\alpha=.866$ 、充実感で $\alpha=.805$ 、私的自意識で $\alpha=.813$ 、自尊感情で $\alpha=.816$ 、自己達成動機で $\alpha=.818$ と十分な値が得られた。

【考察】

自尊感情を「自分には価値があり尊敬されるべき人間であると思える感情」として捉えた。自己実現的態度は、「自己実現を旨としてどのように進めているかという行動姿勢」をいう。私的自意識は公的自意識が他者から見られる自己を意識する傾向にあるのに対して「自己の内面的側面に注意を向けやすい傾向」として捉えた。充実感とは「心が満たされている、満ち足りているという心情」として今ある状況を捉えたものとした。自己充足的達成動機とは、他者との競争によって得られる動機ではなく内的動機づけによって得られといった意味で捉えた。そのため、自己実現的態度と自己受容、自尊感情と自己受容、充実感と自己受容の負荷量に近い値が認められたが、進路指導や授業方法という自分の将来の職業との関連を基に行ったため比較的妥当な結果が得られたと言える。この調査は、人生の節目に当たる時に実施することに意義があると考えられる。

自己実現的態度は私的自意識以外の各因子に有意性がみられる。自己充足的達成動機は充実感以外の各因子に有意性がみられる。自尊感情も充実感以外の各因子に有意性がみられる。心が満たされている蟠りがないものほど、自己実現に向けて行動しやすい傾向にある。更に心の蟠りを少なくするためには、自己のありようをそのまま受け入れることが重要である。また自分には価値があり尊敬されるべき人間であると思える感情が高いほど、内的動機づけが高まると考えられる。自己の内面的側面に注意を向けやすい傾向にあるものは、自分には価値があり尊敬されるべき人間であると思える感情になりやすいといえる。同様に内的動機づけを高めるには、私的自意識が影響する。さらに内的動機づけや自尊感情、自己受容も自己実現に向けた動きに大きな影響を及ぼす。自己受容は自尊感情に、自己受容は内

的動機づけに少なからず影響する。このことから、自己実現に向けた行動を起こさせるためには、自己の認知活動(知覚、情動、記憶、思考など)を客観的に捉え評価した上で制御するというメタ認知力が必要であるといえる。例えば栄養教諭として仕事の依頼を受けた際、「自分にはこの仕事を処理する能力はあるか」「ミスがないようにするためにどんなことが必要か」ということが考えられるか否かである。そのヒントとなるのが、自己実現的態度にある。栄養教諭として勤務地に赴任して、「自己実現がなされない」と嘆くのではなく、上記の質問項目の内容を実行することによって、メタ認知力を身に付けることが大切である。